

ギヴィゲラ峰(トゥインズ 7,350m)登攀

山下 康成

ネパールとインド、シッキムの国境線上にそびえるカンチェンジュンガ山群にあるトゥインズ(7,350m)に、私たち東京農業大学山岳会が初めて登山隊を送ったのは1963年のことである。それは、私たち山岳会にとって、ヒマヤラに送り出した最初の登山隊だった。

この32年前の登山は、ネパール側より行なわれ、7,000mまで達したが、モンスーンの到来による悪天候のため登頂を果たすことはできずに終わっている。その後、中印国境紛争のため、トゥインズは外国人立入禁止地域となり、私たちは再度の挑戦をできないままとなっていた。この間ヒマラヤの高峰の登頂を夢見つつも、その計画の実現さえ果たせぬ長い年月をおいて、ようやく力を貯えて再びヒマラヤへ登山隊を送り出したのは1986年の崑崙山脈7,167m峰であった。この登山の成功の後、1989年にはナンガパルバット、91年ブロード・ピーク、93年ガッシャブルムⅡ峯に登山隊を送り、ブロード・ピーク、ガッシャブルムⅡ峯の登頂を果たすことができた。これら一連の登山を行ない得たエネルギーを継続させた源には、常に1963年に登り得なかったトゥインズがあった。

トゥインズ再解禁のニュースは、1993年思わぬ所からもたらされた。明治学院大学山岳会がインドのシッキム側より登山許可を取得、この登山隊には、私たち山岳会々員である佐藤正倫、谷川太郎の二名が参加したが、佐藤隊員が頂上直下7,000mでヒドン・クレバスに落下して亡くなるという結果に終わった。

1986年の崑崙山脈7,167mに始まる近年の私たちのヒマラヤ登山の間に、私たちは内外の山で4名の会員を失っている。早坂敬二郎、馬場哲也、中嶋真也、そして佐藤正倫の4名である。彼等は1963年のトゥインズに始まる私たちのヒマラヤへの夢を継続させ、実現させた主力メンバーだった。そして最後に逝った佐藤が亡くなったのがトゥインズであることに、私たちは深い因縁を感じずにはいられなかった。1994年春、私たちは30余年振りにトゥインズを目指すために、ネパール政府に対して登山許可を得るための働きかけを始めた。

ネパールでは依然としてトゥインズは未解禁の山であったが、再三にわたるカトマンズでの交渉と、現地でトランス・ヒマラヤン・ツアー社を経営する宮原巍氏をはじめとする内外の多くの方々のお力のおかげで、ネパール警察との合同という形で、1995年1月に登山許可を得ることができた。因みに、トゥインズのネパールでの正式名称は「ギヴィゲラ」となっており、私たち登山隊の名称もそれにならって、「東京農業大学山岳会・ネパール警察ギヴィゲラ峰(トゥインズ)合同登山隊1995」とした。

1. 登山の記録

1995年ポスト・モンスーン期に予定したこの登山隊は、トゥインズのネパール側からの登頂と、登頂後は十分な安全性を見極めつつ、可能な限り、頂上直下7,000m付近に眠っている故佐藤正倫君の捜索を行なうという目的で準備された。

隊の構成は、総隊長 山下康成、日本側チーム・リーダー 小笠原岩雄、クライミング・リーダー 谷川太郎、隊員 元吉仁志、小林新二、沼野幸正、長久保浩司、広瀬健太、吉田裕一、小池英雄(明学山岳会)、医師 砂子由美の日本人11名。ネパール側は、チーム・リーダー グプタ・バハドゥール・ラナ、クライミング・リーダー ギーター・バハドゥール・ジョーシー、隊員 ラームカジ・シワコティ、フル・バハドゥール・ライ、サンタ・バハドゥール・アレの5名。サードー ミンマ・テンジン・シェルパ、他シェルパ11名、コック他ベース・キャンプ スタッフ 8名、無線技師 1名、リエゾン・オフィサー 1名で総勢38名であった。

8月22日先発隊5名が日本を出発、9月2日には本隊もカトマンズ入りし、9月7日、トラック2台とバス1台で大半の隊荷とメンバーがカトマンズを出発、陸路バサンプルに向かった。

私たちはアプローチの輸送に大型のヘリコプターを活用する方法を用い、道路終点のバサンプルまで隊荷を陸送した後、ヘリコプターのシャトルによって、全ての隊荷とメンバーを最奥の村グンサまで運ぶ計画であった。しかし、9月10日カトマンズよりバサンプルを目指したヘリコプターは、バサンプル上空の視界不良のため、ダンクッタに着陸。まだモンスーンが明けきらず、霧のかかりやすいバサンプルからではなく、ダンクッタより、グンサへの輸送を行なうことになった。既にバサンプルに入っていた先発隊は再びダンクッタまで戻り、9月11日よりグンサへ向けてのヘリコプター輸送は始められた。この輸送は天候不良のため予定よりおくれはしたが、14日には無事全隊荷、全メンバーをグンサまで運び、バサンプルからグンサまでの約10日間のキャラバンを省略できたことで、雨季の大人数のポーターによるキャラバンの煩雑な作業からメンバーが解放され、登山に体力を温存することができ有効であった。

グンサからベース・キャンプ(5,100m)へのキャラバンは9月15日より始まった。輸送の主力は、この地方に豊富なヤクで行なわれ、先行隊は、カンパチェン、ロナークを経て、17日にベース・キャンプに到着。途中、高度順応を行なった後発隊も20日にベース入りし、登山の態勢が整えられた。

カンチェンジュンガとトゥインズを正面にのぞむパンペマにベース・キャンプを建設した私たちは、9月21日、22日の両日を登路の偵察に割いた。ルートの候補として、私たちは以下の三つのルートを検討していた。第一案は、トゥインズの頂上よりカンチェンジュンガ氷河に落ちる西稜を末端からたどろうとするルート。第二案は63年にとられたルートで、カンチェンジュンガ氷河よりトゥインズとクロス・ピークの間に入っている小氷河(クロス氷河と仮称)をつめて、トゥインズとクロス・

1. 登山の記録

ピーク間のコルを経て、西稜の上部に出るルート。第三案は、第二案のコルまで、ネパール・ギャップ側の氷河よりまわり込んで出ようというものであった。

2日間の偵察の結果、第三案は氷河の情態が悪いことが判明、また第一案も西稜末端部は上部に崩れそうなセラックがかかる岩壁で危険と困難が予想された。第二案のルートは、63年のメンバーより指摘されていた上部ルンゼの上にかかる懸垂氷河の崩落をさけるルートをさがす問題が残ったが、これが最も可能性が高いということで、このルートで頂上を目指すことに決定。そしてC1はクロス氷河上5,600m地点に決定した。

9月23日よりC1への荷上げを開始、9月25日には谷川、長久保、吉田の3名がC1に入り、26日C2へむけてルート工作を行なった。ルート工作隊はクロス氷河をつめ、コルに直接続く大きなルンゼより、クロス・ピーク側に一本手前のルンゼより取り付き、クロス・ピーク側の岩壁の弱点をぬうようにして右上。コルに直接抜けるルンゼの左側にかかる懸垂氷河が消える所で、ルンゼに入ってコルに達した。この岩壁部に11ピッチ半、さらにルンゼに2ピッチ半、計14ピッチの工作を行なった。岩壁部は、日中落石が多く、登山期間中、常にフィクスト・ロープの確認と補修が必要であった。C2はコルから雪のプラトールをわたって、西稜上部へ続く斜面の手前、6,100m地点に決定した。

登山活動を開始してからアタック態勢が整うまでは、隊を三分割し、各パーティは3日行な動して2日休養するというパターンでローテーションを組み行動した。ルート工作は常に、谷川以下3名のパーティで行なうこととし、残りのメンバーは荷上げを行ないつつ、高度順応を図った。また9月末日まではモンスーンの影響が残っているのか、曇、あるいは一時雪といった天候が続いたが、9月28日から29日にかけて、C1で20～30cmの降雪のため、C1以上での行動を中止した以外は、連日行動を続けることができた。そして、この降雪以後、モンスーンは完全に明け、好天が続いた。

10月1日、C2が建設され、2日にはC2から、冬の富士山にも似た大斜面を登り西稜上に出た。高度は6,700m、32年前に最終キャンプ(C5)を設営した場所と思われる。ここを今回はC3予定地点とした。C2よりC3まで17ピッチのロープを固定した。西稜上はカンチェンジュンガ側からの風が強く、トランシーバー交信の際、声を発するのにも不自由を感じる程だった。

この後一旦C1まで下って休養した工作隊は10月7日C3を建設、8日、9日の両日C3より頂上直下まで、西稜の雪のナイフエッジにルート工作を行なった。頂上の手前には遠望して問題視していたピナクルがあるが、その岩峰左側の雪壁にルートを見出すことができた。C3から頂上にいたる西稜上部はやせた雪稜が続くが、技術的に大きな困難を感じる箇所は少なかった。このピナクルの雪壁は雪の状態が悪く、緊張させられた数少ない箇所のひとつだった。

頂上直下までのルート工作、C3までの荷上げを完了して、アタック態勢が整った後、全員ベース・キャンプに下り3日間の休養をとった。そして登頂にむけての活動は10月14日より始められた。

1. 登山の記録

10月15日、第一次アタックのメンバー11名がC3に入ったが、この日の昼前よりすじ状の雲が高層に見られるようになり、10月に入ってから続いていた好天に変化の兆しがかがわれた。

翌16日、夜中続いた強風は朝になって弱まった。アタック隊は5時30分C3を出発した。アタックの後には、故佐藤正倫会員の捜索を行なう予定で頂上直下に、そのためのキャンプC4を設営するため、各自10kg程の荷物を背負ってのアタックだった。

フィックスしたロープを忠実にたどり、C4予定地の7,200m地点で一旦全員が集まった後、ネパール側クライミング・リーダー ギーター・B・ジョーシー氏を先頭に、11時20分、つぎつぎと無風快晴の頂上に立った。第一次登頂メンバーは、ネパール側はジョーシー、シワコティの2名、日本側は谷川、長久保、吉田の3名、他シェルパ6名の合計11名である。頂上ではネパール人メンバーが登頂を神に感謝するタルチョーを張り、日本側メンバーはトゥインズへの夢を果たすことなく逝った早坂以下4名の仲間の写真を頂上の雪の中に埋め、その冥福を祈った。

登頂後、日本人メンバー3名は7,200mのC4に泊り、他メンバーはC2に下った。そして、第2次アタックメンバーがかわってC3に入った。

10月17日、前夜半より西風が強く吹き始め、頂上からシッキム側に、強風による雲が張り出している。ネパール側は視界には問題がないので、強風についてC3より第二次アタック隊が出発。間断なく吹き続く強風の中、小笠原、沼野、小林、広瀬の4名とシェルパ2名が頂上にたつた。

一方、昨夜C4に泊まった3名は、頂上を越えて、佐藤会員の事故現場に向かった。頂上から東峰にむかう斜面は、ヒザまでのラッセルであり、雪崩の危険も感じられ、事故現場を特定することはできなかったが、直線的に下ることはさけて、尾根通しに下った。手持ちのロープ14本をフィックスして、現場まであと2～3ピッチの所まで行ったが、視界が悪くなって断念せざるを得なかった。

この夜はC4に4名が残り、もう一度捜索活動を行う予定だったが、翌18日も強風が続き、C3は天幕3張がつぶされ、完全装備のまま朝をむかえるという状態で、捜索活動を打ち切り、強風の中全員がC2まで下山した。

この後、小池他の第三次のアタックを予定したが、強風は吹きやまず10月22日に上部キャンプを撤回。ベース・キャンプを訪れた支援のトレッキング隊と共に、10月26日ベース・キャンプを後にした。

(東京農業大学山岳会・ネパール警察ギヴィゲラ峰合同登山隊長)